

## 須藤 輝彦



***Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames*** (Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, 2016)

編 阿部 賢一

## 「東欧」をめぐる新しい視点

ベルリンの壁が崩壊して四半世紀以上が経った。旧ソ連の政治的影響化にあった国々が共産主義革命に象徴される「大きな物語」から離れ、それぞれの道を歩みはじめたのに応じて、その当時おもに「東欧」と呼ばれていた地域の文学を扱うさいのフレームワークも多様化してきた。本誌 *Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames* は、共産主義のイメージが根強い従来の「西欧 v.s. 東欧」というヨーロッパ観に捉われず、かといって「国民文学」というナショナルでリージョナルな枠組みに閉じこもりもしない、そんな「東欧」文学の読み方を提示しようという意欲的な書物である。

この目的達成のための戦略は、「序文 foreword」において明確に表現されている。チェコ文学研究者で編者の阿部賢一は、(1)「文学における旅と移民」、(2)「文学史の書きなおし (rewriting)」、(3)「ミクロ国家の文学」という視点に重心を置き、この3本の矢を武器にして本誌を構成する。

第1部「作家たちの声」は、おもに実作のなかで得られた(1)「旅と移民」についての考察にあてられる。チェコの小説家ミハル・アイヴァスは、『オデュッセイア』や近現代ドイツ哲学を参照しつつ、〈他者〉や〈他者性〉との出会いを発見することを現代文学の課題とし(「グローバル化する世界における文学」)、ポーランド文学研究者の小椋彩は、オルガ・トカルチュクの小説『逃亡派』の分析をつうじて新たな旅行文学の可能性と中欧文学の特色を論じる(「新しい旅行文学と空白の場としての中央ヨーロッパについて」)。この第1部には、中欧小説をキノコに喩えるトカルチュク自身の印象的なエッセイも所収されている(「文学にあらわれた《中欧》という名の幽霊<sup>ファントム</sup>」、抄訳は『早稲田文学』6号に掲載)。

さらにポーランド文学研究者である井上暁子の簡潔な紹介文(「グローバル時代のオルタナティヴ・ツーリスト・ガイド」)に導かれ、ポズナニに生まれドイツに移民したポーランド人作家 Natasza Goerke のエッセイが続く。これは旅行者と移民者について、電話の発明とインターネットについて、そして書くことについてのエッセイだ(「十ヶ月と二日。断章」)。

第2部「東ヨーロッパのイメージ—過去と現在における『変わるもの』と『変わらないもの』」は、研究者たちの論考で構成されるが、各論は本評のはじめに触れた3つのテーマごとに配置されている。

阿部賢一はこの部の冒頭(「現代東欧文学をめぐるいくつかの所見」)で、クンデラのいう「中

位のコンテクスト」を援用しながら、上記の「西／東」図式をつき崩す現代文学の実践例を作家ごとに示している。ここで注目すべきは、本誌のいわば戦略的骨子である「ミクロ国家の文学 micro-national literatures」という枠組みが提示されていることだ。「ミクロ国家の文学」とは「国家の公用語ではない言語で書かれた、ナショナライズされていない文学」と簡潔に定義されるが、これは「民族混淆地帯」である東欧地域の文学を論じるさいに有用であるとともに、国民国家の枠組みに縛られない普遍的な概念であり、世界文学論にも開かれている。

さて、(1)「旅と移民」というテーマは第2部でも引きつづき論じられる。井上暁子の「1989年以後のポーランド旅行文学における時間と空間の想像力」は、トカルチュクのいう「歴史なき世代」のポーランド旅行文学を俯瞰しながら、Natasza Goerkeの小説“Before the Storm”を論じる。ここではグローバル時代の文学に対応するためのアプローチとして、ドイツの文学者 Ottmar Ette が提示した「動きまわる文学 literature on the move」という概念が取りあげられている。第2部第1章にはまた、「小さな祖国」や「旅のノスタルジー」といったキーワードをつかって、Wojciech Staron の *The Siberian Lesson* をポーランドのドキュメンタリー映画史のなかに位置づける小椋の論文（「ポーランドのドキュメンタリーにおける移民」）も収められている。

第2部第2章は、(2)「歴史の書きなおし」という主題でまとめられる。ポーランド文学研究者の加藤有子は、「ガリシア文学」という非言語的の区分を導入することによって、2013年の Euromaidan 以来、「西／東」「ヨーロッパ／ロシア」とふたたび二項対立的になっているかに見えるヨーロッパ概念の再検討を図る。俎上にあがるのは主に Yuri Andrukhovych と Andrzej Stasiuk の小説作品だが、それらは先の対立図式を超えるものとして『「私」のヨーロッパ』というある種の実存的区分を基盤とすることが特徴とされる（「ヨーロッパを書きなおす」）。くわえて本章では、Elena Gapova がスヴェトラナ・アレクシェーヴィチの作品を道徳哲学に引きつけて論じた「バラバラの事物」や、「ベラルーシ文学」の抱える困難を背景に Grigory Reles の作品世界の特性を描きだす越野剛の「小さな国家のためのライターズ・シェアリング」も読むことができる。

そして第2部第3章には、現代カシューブ文学の仔細な記録である Grzegorz Schramke の「最新カシューブ文学」、Delia Grigore の「ロマ詩における思考パターン」、野町素己「誰の文学？セルビアのパナト・ブルガリア文学の諸相」が掲載されており、それぞれが非常に貴重な(3)「ミクロ国家の文学」についての報告となっている。

駆け足での紹介になってしまったが、本誌の全体をとおして評者があらためて思い知らされたのは、中東欧文学がもつ溢れんばかりの多様性である。本誌を読むと、これほど多様な言語、多様な民族が集うこの特殊な地域の文学が、たとえば「(旧) 共産主義国」という単一のパースペクティブのもとに語られていた時代があったということのほうが、奇妙に感じられる。逆にいえば、今はそれだけこの地域の「実像」を多角的に論じることが可能になったということであり、本誌は見事にその「時代の要求」を満たしているといえるだろう。

また、ほとんどすべての論考のうちに、〈自己〉や〈他者〉との出会い」といったキーワードが見られたことも評者の関心をひいた。そこには、構造主義者たちの問題系を引き継ぎつつ提起されたエドワード・サイードの「オリエンタリズム」が反響している。

しかし他方で、60年代後半からのいわゆる「現代思想」を席卷したノマド幻想とでもいうべきものは、もはやリアリティを失いつつある。「動きまわること be on the move」それ自体を善とする主張、つまり移動と逃亡を続けさえすれば国家や自我（さらには資本主義）といった近代の「牢獄」から自由になれるという考え方は、グローバル化がナショナリズムと骨がらみになって様々な問題を生みだしている現在では、いささか楽観的に感じられるだろう。第2部第3章「ミクロ国家の文学」、とくにロマ文学との関係で紹介されているのはまさにこの単純なノマド礼賛に抗うテキスト群だといえるし、本誌に何度も登場するトカルチュクはこのような「旅／逃亡」の「功罪」をそれぞれ鋭敏に感じとり、こまやかな手つきで表現しているように思える。

放浪の「プロフェッショナル」であるユダヤ人の格言に「いくら旅をしたところで、自分自身から逃れられるわけではない」という言葉があるが、旅や移民という視座があたえられると、自己や国家、あるいはそれらを規定する言語といった昔なじみの概念にも、いわば逆照射のかたちで、新鮮な光が当てられる。評者が本誌から受けとったのは、そんな新しくて明るい読後感だった。